



ねっとわあく

ひとひと
ともに担い、ともに築く、女と男の情報誌

NO.40

特集

「男らしさ」のバリア

自分らしく生きていきますか？



P2~3

大切にしたいものに
素直に生きる

自分を生きる



P4~5



解放

P6~7

人生は仕事だけじゃない



P8~9

P10~11

大学生インタビュー

P12

ねっとわあくタイムカプセル

P13

意識調査

P14

男女共同参画会議始まる!

男らしさのバリア

「男だから」「男らしく」と言われ続けてきた男性の生き方が、今、少しずつ変わろうとしています。男にとつてのジェンダー(社会的につくられた性差)、「男らしさ」を求められることからくる生きにくさ(＝男らしさのバリア)はないのでしょうか。

家族・仕事(企業)・仲間・若い世代をキーワードに、様々な視点から改めて「男らしさ」を問い直し、「人」としての新しい生き方を探っていきます。



モデルからアウトドアエッセイストへ

木村 東吉さん

たいものに 素直に生きる

● 本当にやりたいことは何なのか、どんな人間関係を望んでいるのか。なにげなく流れていく日常の中で、私たちは自分の心と対話することは少ないのかもしれない。自分の心に正直にファッションモデルから趣味のアウトドアライフを仕事に変え、東京から河口湖に移住した木村東吉さん。「何より家族と一緒に過ごす時間を大切にしたい」生き方を聞きたくて、河口湖畔の自宅へお邪魔しました。

田舎で暮らしたいけど、それはリタイアしてからと考える人が多い中、木村さんが東京での生活を捨てて一家で河口湖に移住したのは、36歳のとき。

ファッションモデルで活躍した20代。そのころはモデルとしてのキャリアが一番大事だった。それが、結婚し子どもが生まれ、趣味で始めたアウトドアの仕事が増えていく中で、自分が大切にしたいものが変化していったといいます。河口湖に行くところを知った周りの人たちは、そんな田舎に行ってモデルは続けられるのか、大丈夫か?と心配しました。「もちろん、不安はありましたよ。でも、いいんだ、僕は

Special Interview 大切にし

つてじっくり考えてみれば、おのずと行動できるものだと、真っ直ぐな目は語っています。

妻の直子さんからひと言

この家は七割を大工さんに作ってもらい、あとは二人で仕上げました。二人で壁塗りをしながら、河口湖で夫婦共通の楽しみを見つけていこうと話しました。その楽しみのひとつがマラソンです。彼の子育ては、ルールには厳しいですが、一人の間として子どもに接し、真剣に話を聞きます。父親というより親友のようです。

「うなづね」さん

「らしさ」という言葉は好きでないという木村さん。「僕は父親がいなかったのだから、結婚したときにも夫はこうだ、父親はこうだという固定観念はなかったですね。女が弱くて、男が強いとも思いませんし、女らしさ、男らしさという言葉の基準もどこにあるかわからない。山登りや、マラソンの世界には、そんな『らしさ』を超えてる男がたくさんいますよ」

人からどう見られるかではなく、自分は何をしたいのか、どうありたいのかをぐんぐん追求

これ以上東京でキャリアをつんでお金を儲けるより、カヌーに毎日乗ることができる生活をしたたいし、何より家族と一緒に過ごす時間をもっと大切にしたい、という思いが強かったから。どんな仕事をしてもいいという覚悟をして移ってきたんです」華やかな都会生活にしがみつくとなく、価値観が変われば、行動する。それも夢物語で終らせず、きちんとリスクも受けとめて決断する。「いつも同じテーブルで食べて、同じ枕で寝て、同じ人間関係の中になると、知らず知らずのうちに一つの固定観念に首までつかっていることがありますよね。そうなる、そこでうまくいかないともうダメ、自分の全てが否定されたかのごとく、崩れてしまうのではないですか」

アウトドアは非日常へ入るドア

「キャンプや旅に出ると、車一台やトランク一個だけで何日も生活できることがわかります。アウトドアライフということは、『都会』から『田舎』という場所の移動をさすのではなく、『日常』から『非日常』へ入ることだと思っんです。非日常というドアを開けて、そこに身をおい

何より家族と一緒に過ごす時間を大切にしたい

きむら●とうきち

1958年大阪生まれ。20歳で上京し、男性雑誌を中心にファッション・モデルとして活躍。その後、趣味のアウトドア・ライフを生かし、雑誌・テレビ・ラジオなどのメディアで幅広く活動。95年に河口湖に居を移し、ボランティア・グループ「スリーアローズ」を主宰。人と自然とのあり方を模索・提言している。1女2男の父親。

Opinion・1

今、雇用環境をめぐる状況は大変厳しく、失業率は過去最高となっています。

このような中で、どう働き、生きていけばいいのでしょうか。

あざれあ地域カレッジ「働き盛りの男性のための……40歳からの生き方探し」の講師で、ライフスタイル論・職業適正論が専門の長須正明さんに、そのヒントを聞きました。

重荷をおろそう 自分を生きる

拓殖大学政経学部講師 長須 正明さん(静岡市出身)

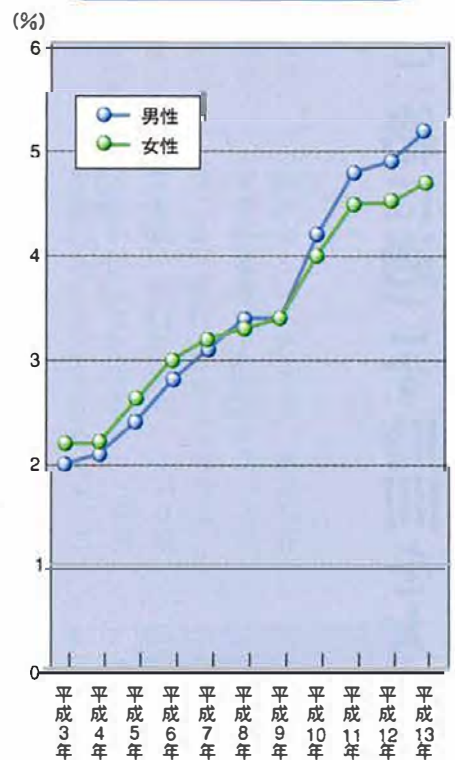
私たちは、それぞれの仕事上のポジションにとられがちで、また過度の責任感を持ちがちで、そのことで悩む人も多いのです。例えば、現場で働いていた人が、管理職になると生き甲斐がなくなってしまうという場合があります。昇格試験を受けないと若年退職の対象になるし、昇格しなければ給料が上がらないので、不本意ながらも管理職になる。けれど、現場で機械を相手にしているのが「本当の自分」で、今の自分は自分の気持ちに反して管理職に「なっちゃった自分」。現場の職員として優秀だということと管理職として優秀だということとは別の次元です。また

割り切りも大事

人格が立派だから有能な管理職になるとも言えません。

適材適所ということは、今の企業組織の中では求めにくいわけですね。そのギャップに私たちは思い悩むことがあります。多くの人は社会的に名を残すわけではないのです。よく考えてみると、私たちはたいして代替可能な労働力としてあるポジションに就いています。自分しかその仕事をできないのかというと、そんなことは決してありません。定年でやめたり、配置転換で部署が変われば、別の人がそのポジションにきて仕事をする。組織はそういうふうには動いています。企業とはそういうものだという割り切りが、私たち働く側に必要だと思えます。仕事自体についても、ある人生の限られ

男女別完全失業率の推移



資料出所：総務省統計局

た場面での自分の役割の一つだと考えてみる。ところが、時には必要です。リストラされてしまっても、今の不景気な時期はアルバイトなどで食いつなぐ、そういう時期だと考える。「今はこういう状態だけれど、決して恥ずかしいことではない。これが永久に続くわけではない」と。

重荷をおろそう

しかし、男性は「仕事だけ」という生き方を自分にも強いてきたし、周りからも強いられてきた部分がありますね。そんな状況のなかで仕事を失うとどうなるでしょう。「嫁さんを食わせてるんだ」「家族を養っているんだ」などの、ある意味では自分の支配力・優越感の源が失われます。自分のアイデンティティーがなくなりません。働かないおやじ——「何のためにいるんだ……情けない……」ということ、自殺する人が出てきてもおかしくないわけです。

今までは男性中心の社会で、男性の方が出世するし、給料が高かった。女性は思うようななかたちでの社会進出ができず、男性の経済力、あるいは経済力を背景にした頼りがいやたくましさ、男性に求めました。それが、

「弱い女性を養っている男」という構図を生みました。ところが、「養う」というのは、対等な関係ではありません。養って当然という意識は、実は男性が自身自身の首をしめることにもなっています。家計の収入が少なくなると、自分だけが責任をかぶらなくても、対等な関係があれば、男性ももつと楽に生きられます。

夫婦がいて、夫が配置転換や降格などで収入が減る、あるいは辞めてくれと言われた場合、妻だつて外に働きに出るといことは当然と考えます。それをそういう緊急時ではなく、普段からやればいいのです。女性が男性に経済的に依存するのではなく、男性が女性に家事を依存するのでもなく、対等な「助け合う」関係をつくっていくことが大切です。

等身大の自分

仕事だけが人生ではないのですから、今できることを無理しないで。自分に過重な負担をかけない。仕事がなくなろうが収入がなくなろうが、自分以外の者にはなれないのですから、「これが俺だ！」と居直るしか

「等身大の自分」を認めるしか「中年期の以降の人生はありません。見栄や箔——いろいろな意味の自分を飾るものはもういらぬから、素顔の自分をさらけだすしかないので。よく言えば「素直な生き方」、悪く言えば「おやじの居直り」ですね。自分に負荷をかけない、疲れないような生き方があっていい。「せねばならぬ」ではなく「できたらいいな」とどめると、楽ですよ。

「等身大の自分」を認めるしか「今の自分」が「リアルな自分」という現実肯定があっていいはず。今の自分でもないわけですが、「自分を生きる」——もつと良い自分、良い夫、良い父親を求めるのではなく、今の自分を認めることが大事です。「良い」というのは結果であつて、やっている時にわかるわけではありません。「今の自分」は自分が認めてやらないうことになりません。現状に満足しろというわけではありませんが、「今の自分」が「リアルな自分」という現実肯定があっていいはず。

Oyaji Study



ながす ● まさあき

キャリア・カウンセラー。静岡大学人文学部卒業。

1999年から拓殖大学講師。人を使う立場・経営者ではなく、常に働く者の立場・労働者でものをみて、データを集め、それをもとに様々な提言をしてきた。最近フリーター問題を社会的に追求している。



企画協力 長須正明
寄稿執筆 上野千鶴子等
『フリーター

200万人時代がやってきた
なぜ?どうする?』
学習研究社 2001年1,400円